

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：25201
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26370668
 研究課題名(和文)ビデオ会議を用いた内容言語統合型学習の研究

研究課題名(英文)Video Collaboration in CLIL

研究代表者

E・A Kane (Kane, Eleanor)

島根県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：40273916

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の大学におけるCLILについて調べた。主に3点に焦点を当て：
 (1) CLILの適切な内容(2) CLIL授業デザインがどのようにHigher Order Thinking Skills (HOTS)の促進する
 のか？(3) ビデオ会議による授業と対面授業。米国の演劇学部と協力、学期ごとに3回ビデオリンク行っ
 た。米国以外、ポーランド、パキスタン、ペルー、スコットランドの助産学部とのビデオリンクを行った。高校
 や大学の英語教師はCLILに興味があるが、コンテンツを教えることについて心配している。CLILを促進するた
 め、ワークショップを行い、学会で自分の大学におけるCLIL授業を紹介した。

研究成果の概要(英文)：This study investigated suitable content for CLIL classes at Japanese
 universities; which elements of CLIL courses encourage the use of HOTS; how to design a CLIL course
 to encourage more communication; and whether video-linking leads to the same results as face-to face
 interaction with overseas students. I worked with a professor in the US. We co-taught classes in
 English via video link three times per semester. We did outreach work with our university students
 in elementary schools in both Japan and America. Our work won East Carolina University's
 Collaborative Teaching Award in 2016. I organized content video links with Poland, Pakistan, and
 Peru, and with student midwives in Scotland to share best practice. I wrote 6 papers on CLIL; made 8
 presentations; gave 2 workshops in Japanese introducing CLIL to high school teachers; and organized
 two CLIL symposia for university teachers in Japan. While teachers are interested in CLIL, many are
 nervous about teaching content in English.

研究分野：TESOL

キーワード：CLIL CALL telecollaboration

1. 研究開始当初の背景

外国語教育においてヨーロッパや香港で内容言語統合型学習が主流の方法となっているのに対して日本の大学は伝統的な外国語としての英語コミュニケーションアプローチや文法翻訳に重きを置いている。内容言語統合型学習は学ぶ側と教える側に内容と言語の両方に対して追加言語が使われる二重点の教育手法である。教えることと学ぶことの過程で内容だけでなく言語にも焦点を置かれている。(Coyle et al, 2010:1) 現在、多くの日本人学生は外国語として英語を学んでいるが、一握りは内容を英語で学んでいる。さらに少数の学生しか海外の学生と一緒に学ぶ機会を持つことができない。日本ではまだ数件の内容言語統合型学習についての研究と共同教育しかなされていない。この研究は英語学習の差を埋め、内容言語統合型学習をコミュニケーションランゲージティーチングの補足するための手法として奨励しようとしている。

2. 研究の目的

内容言語統合型学習における態度とモチベーションに与える影響について、対面式とビデオ会議式の両方を使って日本人とアメリカ人の学生を対象に調査した。以下の4つの観点から調査を行った。

- ・どのような内容がビデオ会議形式と対面式において日本の大学での内容言語統合型学習に適しているか。
- ・内容言語統合型学習コースのどの要素が上位の思考技術の使用をより後押しするか。
- ・どのようにすれば教師が学生によりコミュニケーションツールを使わせる要素を組み込んだ内容言語統合型学習コースをデザインすることができるか。
- ・ビデオ会議式は海外の学生との対面式交流と同じ結果を導くことができるか。

3. 研究の方法

この研究費によってイースト・カロライナ大学の演劇学部の教授と共同研究する機会を得られた。それによって、1学期に3回もしくは3回以上のビデオリンクによる英語の授業を共に教えた。日本の大学生が日本とアメリカの小学校において課外活動を行った。海外共同研究者によって2015年、日本で日本人学生に対して3日間の対面式ワークショップを行い、また2016年には、英語教員に対して演劇のワークショップを行った。2014年には英米文化の対面式内容言語統合型学習クラスを教え、2016年には英語のみでの国際問題の必修授業を教えた。ビデオ会議式授業を受けた学生は授業前後に内容言語統合型学習の4C(内容、コミュニケーション、知識、文化)についてのアンケートに回答した。対面式授業の学生には同じアンケートをコース終了後に実施した。

調査の実施内容(論文・発表を除く)

2014年度。4月：同意書の回収と事前アンケート、前期はアメリカ、中国、ロシアとの隔週ごとのビデオ会議式授業。5/20：地元の小学校でイースト・カロライナ大学の演劇学部と島根大学の学生によってビデオ会議式授業をおこなった。6/22：広島で開催された全国語学教育学会でCBIの考え方に関する講演会に参加。7/23：輔仁大学の教授が島根に来られた際、授業内容の可能性について話し合った、事後アンケートを行った。8/25：西スコットランド大学の教授に会い助産師学生とのビデオ会議式の内容について話し合った。9/13：上智大学大阪サテライトキャンパスの内容言語統合型学習の発表に参加。9/22-28：イースト・カロライナ大学の共同研究者に会いに行き調査について話し合った。12/16：西スコットランド大学の助産師学生と島根大学の学生にビデオ会議式授業を行う、事前事後アンケートを実施。12/19：イースト・カロライナ大学演劇学部とのコンテンツビデオ会議式授業を行う。12/22：上智大学大阪サテライトキャンパスの内容言語統合型学習の発表に参加。2015年3月：イースト・カロライナ大学の日本語学部と島根大学で語学交流ビデオ式授業を3回行う。

2015年度：前期にペルーのESAN大学と1回、台湾の輔仁大学と3回、アメリカのイースト・カロライナ大学と1回、ペルーのUSILと3回コンテンツビデオ会議式授業を行った。4/15：イースト・カロライナ大学演劇学部とコンテンツリンクを行った。5/10-17：中国の西安市にある陝西師範大学で開かれた教育におけるグローバルパートナーの学会に参加し、世界各国の教授に会いコンテンツリンクの可能性を話し合い、海外協力者との調査プロジェクトを発表した。5/22：島根大学で内容言語統合型学習シンポジウムを開催し、上智大学の池田真教授を招き内容言語統合型学習を地元の先生に紹介をし、そのほかにも3つのプレゼンテーションと4つのポスターセッションを行った。5/27：島根大学とパキスタンのFataima Jinnah女子大学とのビデオリンクを行った。7/15：島根大学の学生がグリフィン大学のオーストラリアの学生と対面式授業を行った。7/22：最終アンケートを行った。10/9-12：共同研究者が3名の演劇部の学生を連れて島根大学を訪問しワークショップを行った、またイースト・カロライナ大学の学生と島根大学の学生とで文化祭で一時間の英語劇を子供たちに行った。ワークショップの事前事後アンケートを行った。10月~12月：ポーランドのクロスノ州大学と島根大学の間で4回のビデオリンクを行い学生の卒業論文について話し合った。12/16：地元のコミュニティにたいして公共ライブビデオをつないで島根大学とイースト・カロライナ大学演劇学部共同で日本のお話を演じた。イベント前に2度の内容と機材についての打ち合わせビデオリンクを行った。

2016年度。5/8-15：中国の西安市にある陝西

師範大学で開かれた教育におけるグローバルパートナーの学会に参加し、世界各国の教授に会いコンテンツリンクの可能性を話し合い、海外協力者との調査プロジェクトを発表した。共同研究賞を受賞した。7/6-10：共同研究者が島根大学を訪問し、7月9日に学生対象にワークショップを開催してもらい、2時間の「Integrated Language Arts Approach to Teaching and Learning」についてのワークショップを地元の先生に行った。後期：アメリカのイースト・カロライナ大学と6回、中国の河南理科大学と3回のビデオリンクを行った。11/30 イースト・カロライナ大学と島根大学の学生が地元の高校生に手助けをしながらビデオリンクを行った。高校生は英語で七夕について説明する準備をしていた。島根大学の学生は紙芝居形式で七夕についてお話をした。1/25：イースト・カロライナ大学演劇学部と島根大学の学生が説明しながら地元の小学生とビデオリンクを行った。島根大学の学生はイースト・カロライナ大学の学生から演劇方法を学んだうえで英語版浦島太郎を行った。小学生は感想を書いた。

4. 研究成果

内容：内容言語統合型学習のワークショップを地元の高校の先生や大学の教員に行ったことから内容言語統合型学習に興味を持っている一方で内容中心の英語教育に不安も抱いていた。内容言語統合型学習法を言語教育に導入していく上で短い内容言語統合型学習モデル授業を高校の先生に紹介し、また大学の同僚やALTSにドラマ、英米文化、世界問題について取り組んできたコースを発表した。

上位思考スキル：この調査から足場がグループ討論の内容言語統合型学習コースが伝統的な外国語としての英語教育よりも上位思考スキルが引き出せることが分かった。当然のことだが、海外の学生との共同授業が日本人学生のみでの授業よりも本物に近い会話を導きだした。学生が先生と活動する時、先生が主全知であるので学生は「グライスの協調の原理」に従いそれ以上を必要としないことが示されている。しかし一方で、学生が海外の学生と活動する時、本物の情報のギャップが生じ、英語の使用が必要となる。

会話ツールの使用を増すためのコースデザイン：共同プロジェクトを含むビデオリンクコースによって、学生が頻繁に授業外で親との関わりを持つようになった。学生はメール、メッセージャー、WeChatを使用して中国と報告をしあった。演劇学部と島根大学の学生は非公開のFacebookグループに参加し、日常的に英語で彼らのプロジェクトについて投稿したり、互いの国の写真やプロジェクトに関する活動を共有した。アメリカの学生は地元の学校や子ども病院で「桃太郎」と「笠地

蔵」を演じたときの写真を投稿した。日本の学生は「桃太郎」に出てくる桃や、「笠地蔵」に出てくる鏡餅など、劇に出てくる物の写真を投稿した。アメリカの学生はFacebookグループを活用して、衣装は適切か、どのようにそれぞれを呼ぶべきかなど劇の舞台について質問をした。学生達はメッセージ機能を使ってビデオリンクでの公開実演を調整した。ビデオ会議式 vs 対話式：学生のアンケートから日本人学生は演劇学部の学生との対話式のほうがより効果的だったことが分かった。しかし一度きりの海外の学生との対話式に対して、頻繁に海外の学生と交わされたビデオ会議式の方がよりよい関係を作れたと回答した。異文化コミュニケーションを効果的に行うために今までの研究はグループ内の協力があること、権限者の支えがあることなどの同等の状態であるべきだと主張している。このプロジェクトはこれらの基準を満たすことができていた。

その他のこの調査の結果：日本とスコットランドの助産師学生の間でそれぞれの分野の一番の練習についての一度のビデオ会議式の授業を設けることでできた経験に感謝する。2014年の研究費によって、日本人学生を対象とする内容言語統合型学習の言語テキストの作成、4本の論文とビデオリンク、内容言語統合型学習とビデオリンクについての10件の発表、地元の高校教師に内容言語統合型学習を紹介する2時間のワークショップ、日本で地元の高校教師、ALTS、大学教員対象に内容言語統合型学習を紹介する2度の内容言語統合型学習シンポジウムを主催した。また、海外で開催されたビデオ協力についての学会に2度渡航することができた。ポーランドクロスの州立大学の教授に会い、彼の学生とのビデオ会議式授業を行った(2015年から2016年に5回)パキスタン(2015年に1回)とペルー(1回)とも定期的に行われるビデオ会議式授業に加え行うことができた。アメリカの共同研究者との調査は2016年のイースト・カロライナ大学協力プロジェクト賞を受賞した。同時性のビデオ会議式授業は時差がリアルタイムでの接続を妨げる国々での非同時性モデルの発展を導いた。2016年10月以来、メキシコとオランダの協力者と内容重視の交流をさらに多くの学生に拡大させている。昨年は48人の大学2年生がメキシコかオランダとオンライン上で1ヶ月の必修授業を受講した。彼らはビデオを非同時的に交換し、共同プロジェクトを完成させた。このプロジェクトを引き続き続け、2018年には島根大学の他の教員とともに拡大させて行く。

(翻訳：澤田あゆみ)

<引用文献>

Coyle, D., P. Hood, & D. Marsh (2010)

Content and Language Integrated Learning.
Cambridge: CUP.

Dalton-Puffer, C. (2007) *Discourse in CLIL classrooms*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. Kane, Eleanor. Students' perspectives on required English courses taught via a Communicative approach and a CLIL approach. 総合政策論叢、査読有、33号、2017、25-39

2. Kane, Eleanor & Clark, Patricia. Telecollaboration versus face-to-face workshops: a CLIL 4Cs perspective. Proceedings of GPE9. 2016、査読有、25-30

3. Kane, Eleanor. Videoconferencing to Share Best Practice: Japanese and Scottish student midwives collaborate. 総合政策論叢、31号、2016、査読無、103-112

4. Kane, Eleanor. Videoconferencing for Intercultural Education. JALT2014 Conference Proceedings、2015、査読有 Tokyo: JALT、165-171

[学会発表] (計 10 件)

1. Kane, Eleanor. Collaborative CLIL classes with overseas universities. Presentation. 2016/7/3. JACET conference. CLIL beyond Europe. 東京。

2. Clark, Patricia & Kane, Eleanor.

Telecollaboration versus face-to-face workshops: a CLIL 4Cs perspective. Presentation at Global Partners in Education 9. 2016/ 5/10. Yekaterinaburg, ロシア。

3. Kane, Eleanor. Writing CLIL Materials. Presentation. 2015/12/6. Hiroshima JALT Mini-conference. 広島。

4. Kane, Eleanor. 21世紀のソフトスキルの育成. Presentation. 2015/12/3. The University of Shimane FD. 島根県立大学。

5. Kane, Eleanor. CLIL courses and Video linking at the University of Shimane. Presentation. 2015/5/22. CLIL Symposium. 島根県立大学。

6. Kane, Eleanor. Writing CLIL Materials: a selective list of CLIL tasks and thinking skills. Poster presentation. 2015/5/22. CLIL Symposium. 島根県立大学。

7. Clark, Patricia & Kane, Eleanor. Global Story Book Theatre. Presentation. 2015/5/11. Global Partners in Education 8. 西安、中国。

8. Kane, Eleanor. 内容言語統合型学習 (CLIL) の手法を活かした中学校の授業づくり 2015/2/12. 島根県中学英語研究会。島根県立大学。

9. Kane, Eleanor. Story-telling for International Communication Presentation. 2014/11/23. JALT National Conference. 筑波。

10. Kane, Eleanor. Cross-cultural outreach

projects between Japan and the US.
Presentation. The University of Shimane.
Global Understanding Seminar. 2014/7/23
島根県立大学。

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

Kane, Eleanor. ビアトリクス・ポターからハリーポッターのイギリスの児童文学：内容語学言語統合学習のアプローチで読む. 公開講座. 2016/9/28. 島根県立大学.

内容言語統合型学習シンポジウム（計 2 件）

CLIL Symposia (2 in total)

1. Integrated Language Arts Approaches to Teaching and Learning. 2016/7/9. 島根県立大学。

2. University of Shimane CLIL Symposium 2015. 2015/5/22. 島根県立大学。

ホームページ等
eleanorannekane.wordpress.com/

6. 研究組織

(1)研究代表者 E・A Kane (Kane, Eleanor)
島根県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：40273916

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()